

TRIAL &

JVC 日本国際ボランティアセンター会報誌 トライアル・アンド・エラー (試行錯誤)

ERROR



【特集】ラオスの新事業、そして水害

森は生活のよりどころ
開発と水害に直面するラオスの今

【報告】イラク事業。クラウドファンディングの目標達成

クラウドファンディングの
ご支援ありがとうございました

【報告】パートナーNGOスタッフ招へい報告

アフガニスタンを
生きる人と出会った

【報告】モザンビーク・サイクロン被害支援報告

「種子支援」から
見えてきたこと

ラオスの農村。稲作技術改善研修の一環として、対象農家の水田で田植えをしている様子。JVCのスタッフも共に作業した。



[特集] ラオスの新事業、そして水害 ■■■■■■■■■■

森は生活のよりどころ 開発と水害に直面する ラオスの今

豊かな森林に生かされているラオスの村人。一方で、その自然資源を利用するプランテーションやダム開発などの大規模開発のために負の影響にも直面している。JVCは、1980年代から村人とともに農業支援などの地域開発事業に取り組み、1992年からは森林保全プロジェクトも加えて一定の成果を上げてきた。

だが2019年8月末の集中豪雨と洪水は、活動地の水田を破壊し、種もみすら失わせる甚大な被害をもたらした。ラオスの事業報告と洪水被害を併せて報告したい。



村人主体の森林管理の実現には
努力を重ねるしかない。

ラオス事業担当 木村 茂

自然が豊かだからこそ大規模開発に脅かされるラオスの村人。JVCは、ラオス初となる住民が管理するコミュニティ林の設置を行政に認証させるなど、村人が主体となった森林管理・利用の実現を目指してきた。開発の波はやまず、政策批判すれば逮捕もあり得る社会のなかでの活動は、村人と行政、それをつなぐNGOの協力の積み重ねによってはじめて実現する。2018年3月から始めた新事業の報告とともにこれまでの活動を総括したい。

自然資源に恵まれた国、 開発に脅かされる農村

ラオスは周囲を中国、ベトナム、カンボジア、タイ、ビルマ／ミャンマーの5カ国に囲まれた東南アジアの内陸国。本州ほどの面積に千葉県の人口に匹敵する約650万人が暮らす。国土の7割が山地で、同時に森林だ。人口の約7割が農村に暮らし農業に従事する、農民中心の国でもある。

村人はかつての日本のように、集

落の周りの水田や畑地で主食のコメを栽培し、周囲の森から生活用水や耕作のための水、食料、建材や染料、燃料の薪、薬草などを得ており、その暮らしは森と共にある。

一方、2000年代以降、ラオスの経済成長率は7%前後を維持。これは外資系企業に開発された銅や金などの鉱物資源、主としてダムでの水力発電による電力、プランテーションで栽培されるゴムやユーカリ、サトウキビなどの商品作物の輸出によって支えられている。



ラタンの栽培研修の様子。ラタンは森に自生しているので、村人にはよく知られた植物。籐として利用するより芽を食べる。栽培技術を伝え、食料の確保を確実にする



GPSを使って実測した村境を衛星画像に示して村人に説明し、確認する作業をしているところ。より多くの村人の関心と合意を得ることで、活動を確かなものにしていく

ところが、この開発が農村に負の影響を与えている。例えば、森林の商業伐採は既に禁止されて久しいが、政府から許可された開発事業の実施に伴い、「支障木」（注1）の伐採を名目にした違法伐採が後をたたない。大きな木が残る豊かな森でも「荒廃林」と指定してしまうことで、伐採やプランテーションへの転換が行われてしまうこともある。

これら開発は、生態系に影響を与えるだけでなく、大量の有害物質の廃棄、農薬や化学肥料などの散布、ゴミ投棄などによる村人の生活圏の継続的な破壊も生起している。これ

を規制する法律は順次整備されているものの、遵守されないケースもしばしばだ。

一方で、環境保全のために整備された法律に基づき森林保護地域が設置されたことで、村人が補償もなく耕作禁止や強制移住せられるケースもある。補償があったとしても、不当なほどに低廉な額面での土地収用や借上げが横行しているのだ。

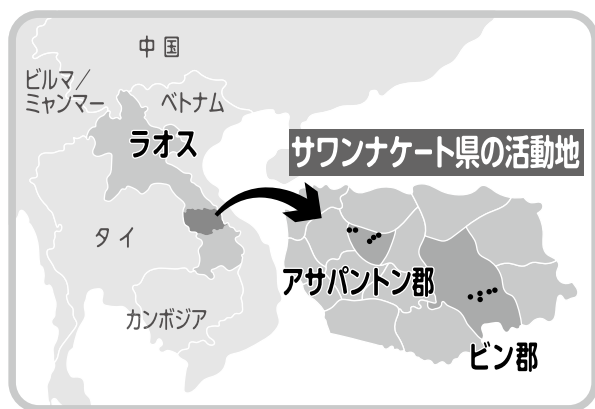
JVCの活動の経緯、目標

JVCはラオスで、1988年から農村開発事業を中心に活動を行ってきた。

そして92年、JVCのスタッフは、ある村に入ってきた商業伐採に抗う村長が警察の圧力に屈するのを目の当たりにしたのを機に、森林がいかに重要な生活基盤かを認識し、93年から、現在の活動地、サワンナケート県の北隣にあるカムアン県で、森林保全活動と農業・農村活動を柱にした地域開発事業という現在のような形の活動を始めた。

この活動は、同県の主要な幹線道

◎注1…道路の通行や生活一般、事業の実施などに際して、支障となる木のこと。



路沿いでの活動が概ね終了したことを受け、09年にはサワンナケート県に活動地を移して新たな事業を開始した。

サワンナケート県は、面積、人口ともにラオス最大で、中・西部にはラオス最大の平地が広がり、農業が盛んだ。国土を縦貫する国道13号線と、タイからラオスを経てベトナムまでを横断する、日本のODAで整備された国道9号線（通称、東西廻廊）が県都のサワンナケート近郊で交わり、工業団地が設置され、北東部にはラオス最大の銅山を控え、各

サワンナケート県農村部住民による 自然資源の管理・利用支援 プロジェクト

対象地域の住民が、土地を含む地域の自然資源を、主体的に管理・利用できるようになる。

【活動地】

サワンナケート県ピン郡・アサパントン郡の各5村ずつ（計10村）

【実施期間】

2018年3月1日～2021年3月31日

【対象者数】

ピン郡対象村5村の約440世帯（約2,600人）、アサパントン郡対象村5村の合計約970世帯（約6,700人）、当該地域で関連業務に従事する行政官約30名

新事業は、18年3月に3年間の予

新規事業 「自然資源の管理・利用 促進プロジェクト」の特徴

地に猛烈な勢いでユーカリやサトウキビ、ゴムのプランテーションが拡大しつつある、いわばラオスの成長エンジンの県でもある。それ故に土地収奪の問題も深刻であることから、ここでの活動が開始された。基本的な内容はカムアン県での活動と同じだが、特に法律研修による村人の権利意識啓発に力を入れ、農業支援や井戸などの整備も行うことで、村人の食料確保能力の向上を目指した。

定で始まった。村人が主体的に、かつ、安心して自然資源の管理・利用ができるようになるための支援に重点をおいた。

自然資源管理における住民のエンパワーを行うにあたり、まず実施したのは、時間をかけての活動地域の事前調査だ。平地が多い西部のアサパントン郡と、山がちな東部のピン郡南部で5村ずつ対象村を選び、村人へのインタビューなどを通して村の暮らしやニーズを十分に把握、より細かく適確に住民が主体性をもてる活動の組み立てを考えた。

具体的にはGPSを使って村の正確な地図を作り、そこに村人が共同で守り使うコミュニティ林の位置を示した。

樹種の調査なども行い、単に村人が利用の権利を主張するのではなく、より実証的に木の利用（建材にする、食べる、売る、その他）を

記録し、まずは村人が自覚的にそれらの価値を説明できるようにすること、さらに村の人口や面積などの基礎データ、歴史などもまとめることを目指した。

こうした作業を通じて、まずは村人が、自分たちの暮らしや自然の役割を相対化し、再認識し、同時に、森林資源の収奪や土地収用などを目論む外部者に、村人による資源利用の実績を根拠をもって示し、対等な話し合いができるようにする。特に森林は、村保全林の承認を行政機関から取ること、法的な承認も得る。これによって村人の結束も強化し、より積極的な管理・利用を実現できると考えている。

これは河川に関しても同じである。現在のラオスでは、ダム建設や農業散布によって暮らしに直結する生物資源、生態系の変化を示すデータが極めて少ない。村にいる魚種を調査して記録に残し、必要ときには非持続的な開発や自然破壊を行うとうとする内・外部の個人や企業と話し合う際の根拠にできるようにする。



村人に村内の河川で見られる魚の種類と用途を聞き取っているところ。これを記録することで村人の資源利用を実証するとともに、今後の開発による環境変化の指標にもする

さらに、村人の権利に関する法的根拠を知るための研修を行うが、新規事業ではこれらを担当する行政官への研修にも力を入れていく。

これら活動では、村の環境保全と同時に、食糧確保に資するためのコメやラタン（籐）、畜産などの農業技術の支援も同時に行う。そうすることで、安定した暮らしの確立を図る。

最終的にはこれらの多様な自然、文化、社会条件の中にある村における様々な活動方法や成果、課題をまとめ、行政や他の関連NGOと共有し、将来のよりよい資源管理に寄与することを目指していく。

未来の世代のために

住民主体の森林管理・利用の実現に向けてJVCが活動を始め、おそらくラオス初のコミュニティ林の設置を行政に認めさせることに成功したのは95年。森林法の公布（96年）以前のことである。この分野の活動はラオス人の団体には許されておらず、またJVCのような現場をもつ

た国際協力NGOも極めて少ない。

政府も徐々に住民や住民グループによる森林の管理・利用権を認める法整備など行っているが、末端の行政機関に知られるまでに何年もかかったり、中央と地方でその運用が異なるといったこともしばしばある。こうしたなか、行政と住民を含めて十分な話し合いを行い、折り合える形を模索し、現実的にどうすれば村の暮らしを守るのかを具体的に示し、広げていくことは、大きな

意味があると考えられる。

苦勞して設置したコミュニティ林が、あっけなくプランテーションにされてしまうこともあり、こうした問題を批判しただけで逮捕される恐れすらある。いつ終わることも知れない作業のように見えるが、農村住民の権利の確立に関する活動とはどこでも、人びとのこのような努力の積み重ねによって達成されてきた。本事業においても先人の意志を引き継いで、真摯に取り組んでいきたい。

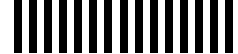
エピソード — 森はよりどころ —

自分たちで規則をつくって20年以上守ってきた村共有の森は、暮らしのよりどころとなっています。タケノコや籐の芽、酸味のある木の葉などが食べられるし、薬草や接骨剤やロウソクとして使える樹脂などを採って使ってきました。子どもの学用品や雑貨でなにかとお金を使っていますが、毎日のおかずは森から採ることで買わずに済んでいます。これまで森の端が開墾されたり盗伐はありましたが、JVCの支援で行政承認を得て、ここがコミュニティ林かを看板を設置することで、より守っていけると思います。

アサバントン郡ソハン村
ポントート集落の男性（40〜50代）



コミュニティ林の活動をするに先立って、JVCスタッフに森の状況を説明してくれたときの村人たちの様子



ラオスの洪水被災地での 支援から見えてきた課題

JVCラオス事務所 現地代表 岩田 健一郎

ラオスの村の古老でもかつて経験したことのない洪水は、JVCの活動地にも甚大な被害をもたらした。家屋の浸水、家財の流出、水田の冠水と種もみの喪失。

JVCは、被災地に食糧、種、苗を配布し、今後は種もみも配布予定だが、村人が洪水の原因と怖れるダム建設にJVCはどう向き合うべきかとの新たな課題も生まれた。今回の支援状況を報告したい。

約20万人を 移転させた大洪水

8月末の台風上陸とそれに前後する集中豪雨の影響により、9月上旬にラオス南部で大規模な洪水が発生した。ラオス政府の発表によれば、洪水は6県44郡、約76万5000人に被害をもたらした。約19万5000人に移転を余儀なくした（注1）。

JVCの活動地であるサワンナケート県ピン郡においても、郡内を

流れるセーバンヒエン川とセーラン川を起点とした広範囲な洪水が発生し、活動村5村が被害を受けた。

5村のうち、特に被害の大きかったニャン村、パシア村、ゲンサイ村（プセー集落）では、家屋の大半が浸水被害を受け、その一部は倒壊し、多くの家財が流失した。また、家庭菜園の野菜や米倉に残ったコメは泥水に浸かって食べられなくなり、土砂の流入によって井戸は使用できなくなった。

現金収入が限られ、周辺の自然環

境に頼りながら自給自足の生活を送る村人にとって、何より深刻だったのは水田の被害である。冠水した水田の多くが収穫不能となり、村人は来年の収穫期までの1年間の食糧を失い、来季の稲作のための種もみをも失った。村人は現在、親類同士でコメを分け合ったり、郡の中心部まで足を運んで物々交換や物乞いをしたりして、何とか暮らしている。

緊急支援の開始、 そして長期支援を 継続するために

JVCのラオス人スタッフに活動村の住民から支援を求める連絡が相次いだのは9月6日のことである。河川の氾濫によって9月3日に始まった村の浸水が2日間高止まりを続けた後に、ようやく水位が下がり始めた時であった。

ただちにJVCは情報収集と対応の検討を開始し、7日午前には現地調査も兼ねた緊急救援の実施を決定した。JVCの活動地で発生し、かつ相当規模の災害であること、また村人から強い支援要請があることに鑑みて、緊急支援の必要性は高いと

判断したためである。

村人や現地行政官からの情報収集により、コメその他の食料、薬、寝具のニーズが高いことが分かったが、薬については適切な内容が判断できないこと、また寝具については予算上公平な対応ができないことを踏まえて、支援内容を食料物資の提供に絞ることとした。

第1次支援（9月7日～12日）を通じ、活動村5村に対して合計1752kgの米、620kgの塩、2100食の即席麺などを配給した。配布に際しては、村内有力者に



上部が流失して橋脚のみが残ったセーバンヒエン川に掛かる橋。洪水の威力を物語る。陸上の交通手段を失った村人は、現在ボートを使って川を行き来している



トウモロコシ、カボチャ、ピーナッツの種を受け取ったニャン村の女性。食料自給のための家庭菜園の活動として、各村で説明会を開いて希望者を募り、農作物の種や苗を提供している

よる囲い込みを防ぐため、均等に分けた物資を世帯ごとに手渡しして、受け取った村人から受領のサインをもらう形式をとった。

洪水発生以降、現地行政は農業再生や保健衛生における重点的な支援を掲げているが、財源不足に悩まされていることもあり、具体的な計画は不透明なままである。被災した村人に対して、行政のみならず民間支援組織、国際機関などによって食料や日用品の支援がなされているものの、断続的かつ不十分な状態が続いている。

こうした状況を受けてJVCは、村人の今の暮らしを支えるべく、食料自給のための家庭菜園の活動として、乾季に比較的短期での栽培が可能な農作物の支援を行っている。これまでに、被害の大きかった3村延べおよそ500世帯に対して、トウモロコシ、サツマイモ、カボチャなどの種や苗を提供した。また、家屋の被害状況を改めて調査し、必要に応じて建築資材を支援することを検討している。今後は村人と井戸の修繕を進めるとともに、来季の稲作の



パシア村の村人に支援物資を届けるJVC岩田(写真中央)。支援物資が各世帯に公平に行き届くように、村人の手を借りながら全世帯分を袋に分けて、個々に手渡すようにした

ための種もみの支援を実施していく予定である。村人の生活再建に向けた中長期的な支援を継続するため、現在寄付を募っている。会員の皆様にぜひともご協力をいただきたい。

村人が怖れる ダム開発

今回の洪水に際して、村人は「ダムが壊れたと思った」と口を揃える。村の古老によれば、過去に水害を経験したことは何度かあったが、ここまで急速に水位が上昇したことはな

かったという。現在、活動村近郊に位置するセーラノン川で建設中のダムは完成間近だが、洪水後の情報収集で得た建設現場の写真や関係者の話を勘案すると、ダム放水への疑いは拭いきれない。しかしながら、近年のラオスの経済成長を支える水力発電ダム開発に不利となりうるこうした情報は、ラオス政府の厳しい統制下では公にされることはない。

村人の心にはダムへの深い恐れがある。洪水によって被害を受けた村人の間では、ダムの影響で再び洪水が起こることを恐れ、高台に移転する話が持ち上がっている。

同じく活動村周辺を流れるセーバンヒエン川にはかねてよりダム建設の計画があり、この9月には請負業者による事前調査が始まった。活動村の村人たちは不安な表情を浮かべながら、ダムの影響を受けない場所に村ごと移転するという案について話し合っていた。村人の中には「ダム建設をやめさせてほしい」と私たちに訴える者もいる。こうした村人の声にどのように向き合っていくのか、JVCの引き続きの課題である。

現地事務所へ

間取りから見るワーク＆ライフ

ようこそ!!

vol.03
スーダン編

事務所の外観

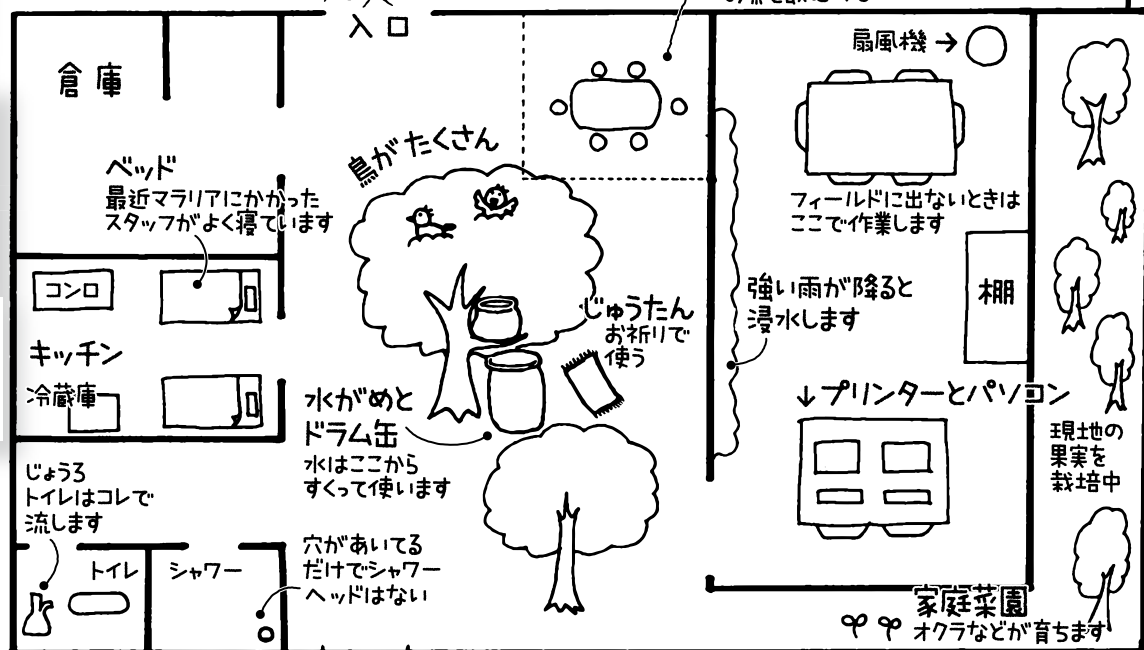
ロバが運んできた
水を買う



JVCカドグリ事務所 見取り図

近所の子もたちが扉を
たたきまわります
(スーダン式ピンポンダッシュか?)

屋根があるスペースにプラスチック製の
机を設置。食事や来客時に使います。
お茶を飲むのもココ



大きな木はレモンで
実がグアバ。
真ん中には
水#瓶とドラム

朝食後
お祈りする

事務所からの風景。
子どもたちが遊んでいる

Q1 始業時間・終業時間は?

少し早めの7:30~15:30です。

Q2 スタッフは、ランチに 何を食べていますか?

スーダンでは11時頃に食べる食事を
朝食といいます。

ファッタという、フルとと呼ばれる豆料
理にパンをちぎって混ぜたものを食べま
す。チーズ、野菜、ターミーヤ(小さいコ
ロッケ)などを好きなようにトッピングし
て、手で食べます。



隣の家が
ヤギを飼っている

Q3 事務所の窓からの眺めは?

山羊や鶏をよく見かける。子どもが
よく遊んでいる。山も見える。
とにかく自然が多い。

Q4 終業後の過ごし方は?

- テレビでニュース・ドラマを観る
- 新聞を読む、読書する
- コーランを詠む
- SNS (Facebook、Whatsapp)を使う
- 家事
- 英語の勉強
- 平和・開発の勉強

Q5 事務所のいいところ 大変なところとは?

【いいところ】

- 綺麗で清潔
- キッチンがあるのでご飯が作れる
- スタッフ皆で協力している、チームワークがある
- 安全
- レモンやグアバの木があり、実がなると食べられるし、夏は木の陰が涼しい
- それ以外にも家庭菜園していて緑が多い
- 立地がよい(マーケットに近い、NGOが多く情報共有しやすい)
- 鳥や猫が庭にいるので、和む
- 同じスペースで皆が働ける

【大変なところ】

- 雨が降ると事務所に浸水したり、屋根から雨漏りしたりする
- 土層が緩く、建物にヒビが入るなど影響あり、メンテナンスが必要になる
- 停電が多い
- 水道がないので、ロバが運んでくる水を買ってドラムに貯めたものを使用している
- ランドクルーザーがなく、好きなときに活発な土地に行けない(特に雨期の際は道が悪く、普通の車で行くのは困難)



水#瓶から水が漏れるが
カップを作って鳥たちが
飲めるようにしている



朝食の様子



ファッタ

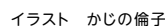


ポテト入りファッタ

次回もお楽しみに!

スタッフの
ひとりごと

パレスチナ現地代表 山村 順子



当地のお店には、主にイスラエル産、パレスチナ産、そして欧米産等の商品が並びます。消費者のタイプとしては、①占領を支持したくないため、イスラエル産を極力避けてパレスチナ産（なければ欧米産）を買う、②安くて質がいいのでイスラエル産を買う、の2者に分かれます。

悩ましいことに、イスラエルではオーガニックなものがブームなので、援助関係者の私たちは政治的な正しさを追求してパレスチナ産を買うか、環境や健康を考えてイスラエル産を買うかで決断を迫られる場面も。イスラエル産も買うというある20代のパレスチナ人は、「占領下の生活は考えることが多くて疲れる。買い物くらい何も考えず欲しいものを自由に買いたい！だから僕はどこのものかを見ずに買うよ」とこぼしていました。とてもよく分かります。これが東エルサレムの悲しき日常です。

いつの時代も「合わない」もの

しかし、ともかく間違いを探し出さなければ信頼性は得られない。「これだからエクセルは信用ならん!」と、私と隣のIさん（同じく経理担当）は結局電卓やそろばんをはじめ始めるのだ。みなさんも、エクセルの信用しすぎにはご注意ください。



目標到達が難しいとの雰囲気もあったが、終わってみれば目標額の140%もの寄付が集まった。感謝しかありません。

【報告】イラク事業。クラウドファンディングの目標達成 ■■■■

クラウドファンディングのご支援 ありがとうございました

JVCは、2019年8月19日から10月3日までの45日間、「戦争・ISで傷ついたイラクの子どもたちの心と未来を救いたい!」とのテーマでクラウドファンディング(インターネットを通じた募金活動)に取り組み、408人の方から計573万8000円のご寄付をいただくことができました。今回の挑戦の経緯や私たちの思いを伝えさせていただきます。



イラク事業補佐
中野 恵美

資金不足…。クラウドファンディングがある!

JVCは1991年の湾岸戦争直後からイラクでの支援活動を始めました。その後、断続的な活動が続けていましたが、04年頃からは継続的な活動をスタートし、特にこの10年間子どもたちの支援に取り組み、

これまでに600人以上の子どもたちをサポートしてきました。

過激派組織IS(いわゆる「イスラム国」)台頭後の近年は、目の前で家族殺害などの辛い経験から精神的ダメージを受けた子どもたちへの心のケアに特に力を入れています。

しかし昨今、イラクへの社会的関

心が薄れ、ご寄付も減ったことによる資金不足から、今年度のJVCイラク事業の継続が難しくなりました。その状況に対し、昨年度よりJVCイラク事業担当となったシリア出身のガムラ・リファイを中心に対応を検討し、クラウドファンディングに挑戦することになりました。

目標金額は400万円。プラットフォームは、JVC専門アドバイザーの鎌倉幸子さんのご紹介で「READYFOR(レディーフォー)株式会社」にし、目標額に到達しなければすべてのご寄付がキャンセル



イラクの「ピースヤード」(平和のひろば)で心のケアを受ける子どもたち

される all-or-nothing（総取りかゼロか）方式となりました。JVCはクラウドファンディングに取り組んだことはありましたが、単体プロジェクトでこれだけの額を目標とするのは初めてでした。

開始の半年ほど前から準備を重ね、ご寄付の募集期間は、お盆休み明け直後の8月19日から10月3日までの45日間と決めました。

**担当者の緊急入院。
集まらない寄付。
それでも。**

ところが、パンフレットやウェブサイトの準備などを進め、開始を5日後に控えた8月14日、妊娠28週だったガムラが突然破水。緊急入院し、そのまま2日後に出産という予期せぬ事態が起きました。クラウドファンディング開始の延期も検討しましたが、告知をすでに始めており、開始を待つ方もいることから、当初の予定通り開始しました。

READYFOR担当者の田島沙也加さんからは「開始5日後で目標額の20%＝80万円到達」を第一目標にと言われていましたが、5日後

でのご寄付は30万円。早々にご寄付くださる方々に励まされつつも、「400万円は無理じゃないか？」という雰囲気もあり、私自身も弱気になりました。

8日後の8月27日にやっと70万円を超えただけで「このままではダメ」と判断、田島さんを交え緊急対策会議をもちました。ウェブサイト上の記事の内容や、ご寄付をお願いする方法などを再検討し、改めて寄付集めに取り組み始めました。

苦しい状況が続くなか、開始から17日目の9月4日にご寄付が100万円を超え、ようやく軌道に乗った感がありました。13日には150万円、19日には178万円、24日には240万円と、徐々にご寄付が集まり、力が湧くと同時に「すでにご寄付をいただいた方々の思いに心えるためにも、絶対に目標到達する」と決意を新たにしました。

**ご寄付の気持ちには
活動で応えます！**

この頃にはガムラも退院し、一部業務に参加、協力して各方面への働

きかけ、クラウドファンディングのサイトやフェイスブックでの発信にさらに力を入れました。

そして9月27日、ついに目標の400万円に到達しました。引き続き、目標額をさらに上げる「ネクストゴール」として500万円を設定すると、それも10月1日に到達。そして、最終的には計573万8000円のご寄付をいただくことができました。

ご寄付者の約4割がJVCの支援者、約6割が今回初めてのご支援者でした。男女別ではほぼ半々です。

ご寄付いただいた皆さま、本当にありがとうございました。また、毎日新聞・東京新聞はじめ大手メディアの方々、フリージャーナリストの方々、そして個人の皆さまが共感と熱意を持ってこのクラウドファンディングのことを伝えてくださったことが、目標到達への力になりました。心より感謝申し上げます。

また、鎌倉さん、田島さんには大変お世話になりました。お二人からの助言と励ましがなければ、ここまでできなかったと思います。

開始前や開始直後には考えられなかった額のご寄付をいただき、皆さまがJVCに寄せる信頼と期待、そしてイラクの子どもたちへの温かい思いを強く感じ、感謝すると同時に強く励まされ、しっかりとした活動を行う責任も痛切に感じています。

10月以降、イラク全土では政府の汚職や失業率の高さに抗議するデモが続き、400人以上の死者が出る事態となっています。アブドルマハディ首相が辞任表明したもの、なお混乱が予想されます。政府によりインターネットが部分的に遮断され、現地との連絡もときに難しい状況ですが、それでも今回のご寄付により、11月現在、現地キルークでは57名の子どもが心のケアと平和教育のワークショップに参加しています。中東地域の先行きがさらに見えにくくなる中、今後も現地の人々と一緒に地域の課題に取り組みます。どうぞご支援をお願いいたします。

クラウドファンディングの
詳細については下記サイトを
ご覧ください。



来日時のイベントで、自らのこれまでの人生を語るアジマール

[報告] パートナー NGO スタッフ招へい報告 ■■■■■■■■■■

アフガニスタンを生きて人と出会った

昨年11月、アフガニスタン事業のパートナー団体 Your Voice Organization (以下 YVO) からアジマール・クラムさん (33歳) が来日した。私は JVC に関わるまで、アフガニスタンに関する知識はほとんどなく、知る機会もなかった。今回、現地で平和のために活動する「当事者」の彼とともに時間を過ごすなかで、現地の人々が私たちに求めていることとは何かを考えた。今回、アジマールさんから見えたアフガニスタンの「日常」と「現地の声」に迫る。



2019年度広報インターン
守屋 亜純

Cで働くことを決めたそう。

実際にお会いすると、物腰の柔らかい、フレンドリーな一面もありつつ、紳士的な品がある方だと思った。今回の東京滞在中には様々な文化の違いを感じていたようで、JVCのSNSのなかでも、水引がついたご祝儀袋を見て「これ、ラブレター用だよな?」と言ったことや、生の魚は身が硬いと思って食べられなかったことなどがつづられている。逆に、ラクダの肉がおいしいことを私たちに教えてくれた。他愛もない会話から、お互いの文化の当たり前が覆される発見があった。

仕事に行くことが
命がけの日常

米軍主導のアフガニスタン侵攻から18年が経ち、一般市民への被害は増え続けている。一市民として、そしてNGOスタッフとしてアジマールさんの日常を見ていきたい。

敬虔なイスラム教徒である彼の一日は、祈りを捧げることから始まる。朝5時に起きると、身体を清め、祈りを捧げ、コーランを読むのだ。そ

ご祝儀袋を見て
「ラブレター用だよな?」

アジマール・クラムさん(33歳)は、現在ジャラバードに3人の子供と妻、親類と総勢14人で暮らしている。JVCアフガニスタン事務所が現地法人化したYVOのプロジェクトコーディネーターとして、村を訪

問して周り、地域住民とともに平和教育活動の普及につとめている。紛争下で生まれ、タリバン政権下

で教育を受けたこともあるというアジマールさんがJVCに関わることになったのは、「戦争に負担してほしくない」という父親の言葉がきっかけだ。大学卒業時、米軍基地がJVCの職員かという選択肢で、JVC



の後、朝食の準備や子どもたちの身支度を手伝う。アフガニスタンでは、家事や育児は一般的に女性の仕事とされているが、彼は積極的に手伝うようにしているという。

7時に出勤。指定の場所で事務所の車にピックアップしてもらって職場へ向かう。車での移動は、時に命の危険が伴う。武装勢力によって爆弾が仕掛けられる可能性があるからだ。そのため、車の乗り降りの度に鏡で車の下を入念にチェックする。

一日の仕事は、治安状況の確認から始まる。そこから、予定の調整をしてオフィスワークや村の訪問など仕事が始まる。

命を守るためには、「自分で気を付けるしかない」と語っていたアジマルさん。政府や特定の国に加担していると思われる

ることが命を危険に晒すことにつながるために、仕事に行くことが命がけ。それが今の彼の日常である。

「僕たちはついでに、
だってまだ生きて
いるのだから」

過酷な状況下で、アジマルさんはなぜ活動し続けることができてくるのか？それは、「息子の死を無駄にしないために、銃ではなく、平和を伝えたい」という、平和な未来とこれからを生きる子どもたちへの熱い思いがあるからだ。

彼自身、紛争の当事者として家族を亡くしている。16年、彼の生後6ヵ月の息子が自宅で具合が悪くなった時、その日に市内で発生した自爆攻撃の影響で道路が封鎖されて病院に行くのが遅れ、到着した後にすでに医師が避難してしまっていたために診察してもらうことができず、その場で亡くなってしまったそうだ（結局死因は不明のまま）。また、18年には、教育機関を狙った攻撃によって、そこで働いていた義父と叔父を亡くしている。

「それでも、まだ僕たちは生きてい

る。何もなくても死ぬかもしれないなら、自分たちにできることをやる」と決意していると話してくれた。この意志こそが、私は未来への希望だと思った。

いつか両国の
橋渡しになれるように

日本から平和を願って、なにか私たちにできることはあるかとアジマルさんに問いかけると、「アフガニスタンを見捨てないでほしい」という言葉が返ってきた。日本のメディアにおいてアフガニスタンが取り上げられなくなっている中、まずはアフガニスタンについて知ること、そして関心を持ち続けることが支援の形のひとつでもあるのだと気づいた。

今回、アフガニスタンで生きる人に出会ったことで、これまで関心を向けてこなかったアフガニスタンに対する私の意識は大きく変わった。メディアやSNSで取り上げられるアフガニスタンの情報をチェックし、自分なりに歴史を調べ、学び始めた。



アジマル家のある日の夕食

そして、ニュースで報じられる大きな出来事だけでなく、そこで暮らすアジマルさんや彼の家族の日常を思いながら「自分は彼らのために一体何ができるのだろうか？」と考えた。これから大学を卒業し、教育の道を歩むと決めた自分にできることは、自分が学んだことから、次世代の子どもたちにアフガニスタンを知るきっかけ、考えるきっかけを作ることだと思う。

いつか、遠く離れたアフガニスタンと日本の子どもたちが相互に思い合う橋渡しができるような存在になりたい。



視察の1日目に同じく畑を視察させてもらったアーネストさん(写真右)。フェルナンドさんの畑と同じく、砂地になってしまった中で彼の畑だけが緑に輝いていた

砂漠の中のオアシス

モザンビークの中央に位置するソファアラ州のニヤタンダ郡。村の入口で車を降りてから約30分、炎天下、舗装されていない狭い道を「これは野生のトマトだよ」「あの作物はサイクロン被害で枯れたの？」などと

話しながら小高い丘を登っていく。すると、眼下に一面の茶色のなかに一か所だけ緑がある景色が飛び込んできた。まるで「砂漠のなかのオアシス」みたいで、疲れがいきいきに吹き飛んだ。今回のサイクロン被災を受けてJVCが種子支援した畑だ。昨年10月中旬、JVCは支援後の状況を確認するため、ADRAの協

[報告]モザンビーク・サイクロン被害支援報告 ■■■■■■■■

「種子支援」から 見えてきたこと

2019年3月中旬に南部アフリカを直撃したサイクロンは、モザンビークの農地に甚大な被害をもたらした。人口の大半が農民で、その95%以上が、持続的な農業を実践する自給をベースとした小農だ。JVCは現地パートナーNGO・ADRA Mozambique(以下ADRA)を通じて、被害が最も大きかったソファアラ州で小農たちの生活再建のための「在来種子」の支援を昨年春に実施した(本誌337号参照)。



地域開発グループマネージャー／
南アフリカ事業担当
渡辺 直子

力を得て支援先である2地区の人びとや畑を訪問させていただいた。今回のモニタリングにはJVC南アフリカ事務所のドウドウも同行。この日訪問したのは野菜の種子を配布したチラサクア地区だ(今回の支援内容は欄外の表を参照)。

小高い丘を降りていくと、海岸のような砂地になっていた。もともと畑だった場所を、サイクロンによって流されてきた砂があたり一面覆ってしまったそうだ。その奥の「オアシス」、様々な野菜が植えられた見事な畑にフェルナンドさんはいて、はにかんだ笑顔で私たち一行を迎えてくれた。

「家族は全員無事だったよ。でも川から畑に水を引くためのポンプとパイプ、植わっていた作物(メイズ、豆、かぼちゃ、トマト、ピーマン、レタスなど)は全て失ってしまった。自宅も屋根が飛んで、壁にひびが入った。ADRA/JVCからはキャベツとトマトの種子を、別団体から他の野菜の種子をもらった。

私の畑は川のそばにあり、乾期に入っても水にアクセスができるから

◎注1…配布が5月にずれてしまい乾期に入ってしまったため、ティカ地区ではメイズは播種できず(メイズの育成には野菜よりも多くの水が必要となるため)、支援の効果は確認できなかった(今後ADRAを通じて確認予定)。ただ、いずれの地区でも国連機関によってメイズ粉が食糧支援されていた。

【第1次支援】2019年5月 ソファアラ州に **10,000ドル + α** (約150万円)

乾期前に在来種子と農具を配布。ADRAによる被災直後の現地調査から、当初は「乾期前の4月中に、200世帯に主食のメイズと3種の野菜の在来種子、農具を配布」する予定だったが、国連機関や他NGO、現地行政との調整の結果「5月中旬に、郡内ディカ地区の200世帯にメイズ種子と鋤を配布、チラサクア地区の200世帯に2種類の野菜種子を配布」となった(注1)。パートナー：現地NGO「ADRA Mozambique」

【第2次支援】2019年12月～ マニカ州に **10,000ドル** (約110万円)

雨期の種子・家畜を配布。

パートナー：現地NGO「リパニンゴ(プロサバナ事業への提言活動で協力してきた団体)」

(1次、2次) 合計支援額 **約260万円**

すぐに種をまいた。以前に比べたら栽培できるものは少ないけれど、こうして栽培を再開・収穫し、いまでは自宅の修繕もできた。元の暮らしに戻るためのスタートが切れてうれしいよ」

フェルナンドさんの畑の大きさは1ヘクタールあるかないかで、決して広くないものの多種類の野菜が植えられたとても美しい畑だった。この日は他にも3名の畑を訪問。全員が30〜40代の男性で、家族は無事、川のそばに土地があり、ドウドウと「すごいね」と感嘆するほどに、畑を見事に復活させていた。

支援の基準と、 道端で野菜を売る 女性たち

ADRAによれば、今回の支援対象世帯の選定は、「コミュニティ・リーダーなど村の代表者らと、次のふたつの基準に基づいて行ったという。①なんらかの形で被災しており、その中でより困難な状況にある世帯、②畑が川・水場から遠くないこと。②は、①の側面においてより優先されるべき世帯(より困難な状況に

ある世帯)が選ばれない可能性も出てくる基準だ。しかし、サイクロンで水ポンプとパイプが流されたこの状況下では、川から遠いと乾期の水不足で配布された種子を播種できない可能性が高く、支援の有効性を鑑みて②の基準を設けたそう。

「女性たちにも話を聞きたい」とお願いし、次の日は「道端の小さなマーケット」を訪問した。そこで女性たちは、自分で収穫した作物の他に、フェルナンドさんのように栽培を再開させている人々から購入あるいは寄付してもらった作物を、人の往来の多い道端で販売して現金収入を得ているという。畑が川から遠くて栽培できない人や、車で村を通る人たちが買っていくそう。

シングルマザーで5人の子ともと暮らす若い女性、低地に自宅があって家屋・家畜全てを失った上に、子ども3人が洪水で流されてしまった女性、未婚で高齢の父や叔父と暮らしているが、畑が川から遠く播種できない女性…、初日に訪問した男性たちに比べ、生活状況が厳しいことが伝わってきた。

種子支援から波及効果を 生み出す小農による農業

今回、支援先を訪問できたのは2日間で合計8名(世帯)のみ。わかることは限られるが、それでもADRAから聞き取った話と合わせて、以下の2点は確認できた。

【A】程度の差はあれ、野菜の種子を得た世帯のほとんどは播種・栽培し、それが食料調達と生活再建に使われており、支援による一定の効果・成果があったこと。

【B】一方で、いまだ課題を抱える世帯も少なくない。例えば前述の支援条件②でこぼれおちて野菜を栽培できていない、そうであっても世帯の状況が厳しい／十分には栽培できないような世帯でも、マーケットで見たように栽培状況がいい世帯の収穫物を販売、コミュニティ内外の人が購入することで、支援した種子↓収穫物が村の中をめぐる、コミュニティの住民に裨益していたこと。

この【B】に見られるとおり、本事業による種子配布は、川のそばに畑があるという、ある意味で「恵ま

れた状況にある限られた数の世帯」が対象とされたが、種子を得た世帯からの収穫物が「販売物」「購入物」「寄付」としてコミュニティ内をめぐるという波及効果が確認された。

これは、小農らが、自分たちの暮らす地域・土地で、自ら耕しているからこそ可能なことだ。もし、彼ら・彼女らが企業の大規模農場で雇われていたならば、サイクロン被災時には、解雇されるか、その農場が復興するまでは「自ら立ち上がる」ことはできなかっただろう。今回のモニタリング時に撮影した写真を見た方が、小農らの様子を「働くことを喜ぶ顔だね」と表現された。その意味で、この度の支援は、小農らの強さとその農業の意義を、あらためて実感する機会にもなった。

今後、隣のマニカ州で別団体をパートナーとして第2次支援を行う(注2)。また、引き続きモザンビークの人々とその暮らしに関心をいただきたい。この度で支援をいただいた皆様にこの場を借りてお礼を申しあげたい。



JVCは現在、11の国・地域で活動しています。

プロジェクト一覧

9月後半～12月前半

カンボジア

農村における生業改善支援

9月下旬に6年ぶりのスタディーツアーを受入。10代から60代の15名の方々（満員御礼！）が参加し、活動村で伝統料理を習ったり（※JVCが支援・研修した家庭菜園から材料を収穫）、ため池やその周辺の菜園の視察、雨季の冠水対策研修の見学など、事業地には1日半滞在した。参加者からは「豊かさ」について考える良い機会となった」「村を訪れる前と後では、都市部の発展ぶりが違って見えた。この感覚を忘れずにいたい」などの感想が寄せられた。村の協力者からも「こんなに多くの日本人が村の生活に興味を持っているのが驚きであり、嬉しい」「一緒に料理をして食べたのが忘れら

れない思い出」などの声が寄せられており、お互いを知り交流を深める貴重な機会となった。2020年2月に再度実施を予定。

3月に掘削した農業用

のため池の周囲に植えたレモングラスをはじめ、首都・プノンペンに拠点を置くハーブティ会社への原料出荷が好調。モリンガや生姜、パッションフルーツの葉など、村に多くある素材を空き時間に加工し、村にしながら現金収入を得られるという点が人気で、研修の参加希望者やリピーターが増加中。



「ノンケミカルのカンボジア産の原料を探している」という先方のニーズにもパッチリはまっているため、買取額も高い

12月2日からは、朝日新聞A-portで、新たなため池掘削のためのクラウドファンディングを開始。100円から参加可能で目標は30万円。ぜひ応援を！（大村）



クラウドファンディング
サイト
(A-port: 朝日新聞主催)

<https://a-port.asahi.com/projects/100yen/>

アフガニスタン

平和活動／識字教育（ナンガルハル県）

10月、11月にそれぞれ現地パートナー NGO、YVOからプロジェクト調整員アジマル氏と代表サビルラ氏が来日し、それぞれが各地で報告会や支援者訪問などを行った。アフガニスタンでは9月末に大統領選挙の投票が行われ、選挙関連の事件でも多くの人々が武装勢力と政府側の戦闘に巻き込まれ犠牲となっており、事態は緊迫している。治安が回復しない同国の情勢は、日本人の現地訪問も難しく、日本に届く限られた報道ではなかなか把握することができない。こうした厳しい状況の中でYVOが取り組むピースアクションは家庭の中から平和教育を

すすめ、特に若者たちが過激化して戦闘に巻き込まれること防ぐことを目的としている。

今回来日した二人は、ともに人生のほとんどを紛争の影響を受けて過ごしてきた。武器が蔓延する環境で

育ち、タリバン政権下の学校に通ったり、難民としてパキスタンに逃れたり、武力攻撃により家族・友人を失ったりという自らの過酷な経験を話してくれた。活動報告のあとに受けた「アフガニスタンは絶望的な状況に思えるが、なぜあきらめずに活動を続けられるの



沖縄での講演で自身のストーリーとアフガニスタンの情勢、YVOの活動について話すサビルラ氏

か」との質問には、「何もしなければただ犠牲者が増えるだけ。自分も犠牲になるかもしれない。生きているうちに平和を見たい」と答え、彼らの平和への強い思いを日本でも共有することができた。

（加藤）

南アフリカ

子どもケアセンターの 運営支援



有機たい肥づくり。いかに買わずに
身近な資源で作れるか工夫を凝らす

2019年度から、親がいないなど厳しい家庭環境下に置かれた子どもに対し、住民たちが適切なケアを提供できる地域づくりを目指し、新しいパートナー2団体（子どもケアセンター）との協働事業を開始している。センターは子どもの世話をする「ケアボランティア（2村20名）」が運営、計約250名の子どもたちが通っている。

ケアボランティア対象の菜園づくり研修を4月に開始、9月前半にはひと通りの収穫を終えた。9～11月に南アフリカの夏季・雨期が始まることを受けて、収穫後の採種・保存、有機たい肥の作り方、水の有効活用等に関する研修を行い、「次の栽培」を始めている。このことから、年間を通じて継続的に食べものを作れること、時期に応じて必要な準備の内容などを学んでいる。

また、来年からケアボランティア対象のケアに関する研修とセンターの活動プログラムを改善するための研修を本格化させるにあたり、JVCスタッフがケアセンターを訪問、研修に活かすためのモニタリングに力を入れた。（渡辺）

パレスチナ

若者のレジリエンス 向上事業／栄養失調 予防事業



裨益者宅で行われた母乳育児講座。母親が多忙で祖母が参加すること多い。丁寧に対応する保健促進員(写真左)

◎青少年のレジリエンス・地域保健の向上（東エルサレム）：本年が当プログラムの最終年度となるため、各地の学校保健委員会(SHC)が学校間の枠を超えてお互いに学びあう「経験交流」を11月末に実施した。東エルサレムの壁の外側では4回の経験交流が実現（9校が参加）し、各SHCの生徒たちは今回の交流で学んだ異なるSHC活動の良いところを取り入れ、今後の活動に生かしていく予定。また、政府職員や教職員への研修も2回実施しており、SHCの生徒たちを今後も支えていく体制を整えている。

◎子どもの栄養改善支援（ガザ）：栄養、子育て、母乳育児等に関するセッションの継続に加え、長期にわたる栄養失調等の子どもとその保護者へのフォローアップも取りこぼしなく進められており、フォローアップを受けた子どもの健康状態は確実に改善されている。保健促進員の女性たちも実地研修で経験を重ね、技術面においても大きな成長を見せており、地域の子育てアドバイザーとして活躍し始めている。

（大澤）

ラオス

農業・農村開発／土地 森林保全事業／洪水被 災支援（サワナケート県）



洪水被害の大きかったピン郡ニャン村でコメの代用となるトウモロコシなどの種を受け取る村

9月上旬に起きたラオス南部での大規模な洪水では、JVCの活動地であるサワナケート県ピン郡の活動村でも被害があった。食料を提供する緊急支援を行った後、コメや水田のイネの損失などの被害状況を聞き取った結果、次の収穫期までは主食のコメが不足するとの声が多く聞かれた。これを受けて、家庭菜園でコメの代わりとなるような作物を栽培するため、被害の大きかったピン郡の3村でトウモロコシ、サツマイモなどの種を184世帯に配布した。また、土砂の流入で使えなくなっていた深井戸の修繕を進めた。次の稲作時季に不足する種もみや自給用のコメの提供など、さらに生活再建のための支援を行うため現在も募金を呼び掛けている。引き続き皆様のお力添えをいただきたい。

その他、アサパントン郡でコミュニティー林と魚保護地区の規則や地図などの最終化のための作業をそれぞれ1村で行った。また5村を対象に自然の材料から作る防虫剤と肥料の作り方などを伝える稲作技術改善の研修を10月に行い、キノコ栽培の小屋建設などの作業を2村で進めた。（山室）

国内活動

日本国内での 活動資金調達／ メディア露出



『the SOCIAL』出演の大村(写真右)

主催・出展・登壇イベントや講演では、アフガニスタンのパートナー団体スタッフ講演会のほか、ジャーナリストの堀潤さんが平壤訪問を語るイベント、2020年国際協力カレンダーの写真家・竹沢うるまさんがクック諸島を語るイベントが好評だった。またアフガニスタンで暮らす少女が主人公の映画『ブレットウィナー』の上映後のトークにアフガニスタン担当の加藤が登壇して現地の人々について伝えた。

メディア掲載では、一時帰国したカンボジア事業現地代表の大村が日テレNEWS24『the SOCIAL』に出演。約20分にわたり、現地の人々の声や事業を紹介した。

資金面では、12月からは冬募金キャンペーンが始まり、1,050万円の目標に対し現在約850万円が集まっている。国際協力カレンダーは卓上タイプを売り切り、壁掛けタイプの完売を目指し広報を続けている。

その他、2月27日にはJVCが40周年を迎える。ウェブサイトやイベントのほか、40周年記念号となる次回の会報誌の準備を進めている。（並木）

コリア

絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』／大学生平和交流プログラム



野島公園に残る掩体壕（えんたいごう）。戦闘機が丸ごと入る防空壕で、掘られた際には朝鮮人が多数従事した

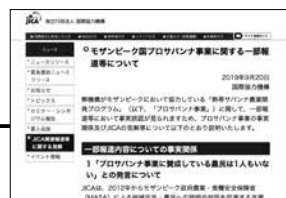
◎『南北コリアと日本のともだち展』：絵画展実行委員会が10月に中国を訪問、吉林省延辺朝鮮民族自治州の延吉市少年児童図書館で絵画展示と共同制作ワークショップを実施し、子どもたち16名が参加した。また、同時期に韓国・京畿道の小学校では絵画の制作も行い、28枚の個人作品が完成した。

◎東北アジア大学生平和交流プログラム：12月上旬に第4回勉強会を関東で開催、学生14名を含む全20名が参加した。関東大震災における朝鮮人虐殺や第二次世界大戦の労働動員に関連した場所、米軍基地のある横須賀や川崎の在日コリアン集住地域を歩きながら、在日コリアンの歴史と日米同盟についてあらためて実感する機会となった。また、夏に行われた「日朝大学生交流」の学生報告会を関東（11月）、関西（12月）で実施した。

新たな人脈づくりを目指して、11月下旬に韓国・イルサンで開催された「日韓市民100人未来対話」に宮西が参加、市民平和連帯のセッションで日朝韓の平和協力について対話、その中で「日朝大学生交流」の事例を紹介した。（宮西）

調査研究

外務省・JICAとの政策協議／各種提言



小農リーダーの言動に対してJICAは「事実誤認」とする「見解」を公表した

◎モザンビーク／プロサバンナ事業関連：8月末に横浜で開催されたTICAD VII（アフリカ開発会議）に際して、モザンビークの小農リーダーおよび市民社会を招へい。その様子を放映したメディア出演の内容に対して、JICAが「事実誤認」とする「見解」を9月下旬にウェブサイトに公開した。小農リーダーを名指しで中傷し、かつ事実の歪曲などが多く見られたため、NGO側から「見解」の撤回と説明責任を果たすための公開討論会の開催を要求。12月現在、撤回は拒否された一方、議員主催で勉強会が開催されることが決定した。

NGO・外務省定期協議会第2回ODA政策協議会（12月12日）に議題を提案、渡辺が当日の議論に参加した。（渡辺）

◎安全保障政策関連：安保法制に対して全国各地で違憲訴訟が行われる中、10月31日、横浜地裁において原告側証人として今井が法廷に立ち、2016年南スーダンでの自衛隊「駆け付け警護」の新任務付与の違憲性について証言した。また、調査目的での自衛隊中東派遣に関して、他のNGOにも呼びかけて専門家を招聘しての勉強会を開催した。（今井）

イラク

現地で「ピースヤード」が開催



「ピースヤード（平和のひろば）」で、異なる背景を持つ子どもたちが平和共存の概念を共に学ぶ

10月以降、首都バグダッドや南部地域を中心に反政府デモと政府側の衝突により400人以上の死者が出ている状況だが、パートナーNGOのインサーンによってキルワーク市内にて「ピースヤード（平和のひろば）」を実施している。57名の子どもたちが、心のケアのプログラムと、平和共存の概念を学ぶワークショップに参加中。子どもたちは、アラブ系・クルド系・トルコマン系など異なるコミュニティに属し、ふだんは通う学校も別々で知り合う機会がないが、ここで出会い、交流を深めている。IS（自称「イスラム国」）との戦闘から逃れてキルワーク市内に避難してきた人々と地元住民との軋轢がある中、ピースヤードには避難民の子どもたちも加わり、互いに交流を深めながら一緒に学んでいる。

（中野）

スーダン／南スーダン

紛争による被災民の支援（スーダン・南コルドファン）／難民キャンプでのスーダン難民支援（南スーダン・イェダ）



図画工作クラス（教員研修）に参加する教員たち（イェダ）

◎紛争による被災民の支援（スーダン・南コルドファン）：

◎給水支援：ウム・ドレイン郡、リファシャギ郡の帰還民地域3か所にて井戸の掘削工事・ハンドポンプの設置を行い、溜め池や集落から離れた井戸から水を汲んでいた住民は、清潔な水へのアクセスが可能になった。また、井戸設置集落でハンドポンプの適切な使い方や維持管理の大切さについて寸劇を交えた啓発イベントを実施した。さらに、住民の手によって維持管理していく仕組みを整えるため、井戸管理委員会のメンバーを対象に、修理やメンテナンスの技術研修及び経験共有の合同ワークショップを行った。（今中）

◎難民キャンプでのスーダン難民支援（南スーダン・イェダ難民キャンプ）：9月に国連機関による食料・生活用品の配布が打ち切りとなったため、これまで配給に頼っていた難民の暮らしが厳しくなっている。

◎幼稚園支援：ボランティア教員を対象とした1ヵ月半の基礎学力研修に37名、教育心理学や教授法を学ぶ2週間のコースには41名が参加した。10月1日に1学期が始まり、登録児童数は1,823名、教員数は90名。

◎紛争孤児支援：現在30名の児童が給食・学用品支援などを受けており、活動の1つである家庭菜園の収穫を終えた。12月11日に始まった学期末テストを全員が受験した。

（山本）

ODA から垣間見える 国家の姿と市民のあり方

地域開発グループマネージャー／南アフリカ事業担当 渡辺 直子

「ODA ウォッチ」と題された本連載の執筆にあたり、これまで渡辺は以下のことを意識してきた。一番の当事者である「現地小農から見た」プロサバンナ事業がどのようなかを伝えること。それを受けて、納税者である私たちが、事業実施主体である外務省・JICA という「権力の側」をウォッチすることで見えてくること／考えるべきことは何かを検証すること。今回は、私たち NGO という「人びとの側」に見えた気がかりについて考えてみた。

外務省のルール無視

JVC と協力団体は、プロサバンナ事業に関して、過去7年間に渡り「NGO 外務省定期協議会／ODA 政策協議会」に議題提案し、外務省と議論してきた。

同協議会には、一定のルールとプロセスがある。①外務省とNGO 双方から議題提案が可能、②提案側が議案書／資料を準備、相手側への質問とともに「事前」に提出、③これに基づいて外務省・NGO 双方の協議会コーディネーター立ち合いのもと、関係者間の「事前協議」が行われ質問への回答もなされる、といったものだ。その後、この事前協議の内容を受けて議案書は最終化される(注1)。

しかしながら、過去一年ほど、外務省のプロサバンナ事業担当課は、①事前協議参加を一方的に拒否・ボイコットして

おり、事前質問への回答もなされない。一方で、②私たちの提案議題の「タイトル」を変更するように注文をつけてくるようになった。それが昨年12月の直近の会議において、外務省側の担当者が変わり、①1年ぶりに事前協議に参加した。しかし、事前質問へは直接の回答はなく、一般論のみが述べられた。また、②事前にNGO 側からタイトル案を5つ用意したにもかかわらず、外務省案が別途示され、結果として変更を強いられた。

NGO 側が理解と配慮を求められる構造

外務省のルール違反と説明責任放棄は明白で、たいへん深刻な問題だ。しかし、今回私の心にひっかかったのは、この状況下で、事前協議後に、NGO コーディネーターから私たちに向けられたことばだった。すなわち、A・今回の担当課の

参加には外務省側の相当な努力があった。ついては、B・議案書の中で事前協議における外務省発言の言葉をとらないよう留意が必要、C・外務省のタイトル案は一応論点を踏まえているのでは、と。いずれもNGO 側に理解と配慮を求める内容で、驚愕した。そもそもa・事前協議への不参加自体が異例かつ問題なのであり、b・一般論の先にある真意を確認するためにその発言に言及せざるを得ず、c・NGO 側から外務省に説明責任を求めて議題提案している以上、本来外務省はタイトルに口を挟んだり、代案を出す立場にはなく、「介入」ではないか。そうコーディネーターに問いかけた。

誤解しないでいただきたいが、NGO コーディネーターが悪いのではない。彼らは外務省のこうした態度に毎回辛抱強く対応し、最善をつくしてくれている。だからこそ、なぜ彼らがNGO の側に配慮を求める発言をするにいたったのか。そこに違和感をもったのだ。

私からの問いかけに対し、コーディネーターらは共感と理解を示しつつ、こう説明した。協議会の場を作っていくプロセスは、圧倒的なパワー(権力)を持つ政府・外務省との交渉事で、「すべきこと」と「できること」に差異が生じる。ゆえに「協議の機会を無にしない」ためにも「NGO 側をお願い」したのだ、と。そう言われて、ふとわが身を振り返る。これまで、タイトルに関して不毛な押し問答を繰り返しながらも、最終的に外務省案で「合意」してきた。必要以上にやり取りを続ければ会議の開催に間に合わ

ず、協議会自体をボイコットしてくるのではという不安がなかったと言えはウソになる。毎回「妥協」してきたのだ。

権力への恐れ／諦め／麻痺 がもたらす先を見ずえ

権力の介入に対する怒りがあるのに、協議の場すらなくなる可能性を懸念するという「権力への恐れ」。そのために、本来なされるべき「権力に対する問い」を「市民からの配慮と対応」で相殺する「諦め」。そして、事前協議不参加という「ルール無視が常態化」され、参加という本来あるべき状態が「努力」と評価されるのは「麻痺」だ。

民主主義国家の基本は主権在民である。国家／政府は国民の意思を受けて設立・運営される。ゆえに、私たち国民／市民には国家が適切に運営されているか監視する役割があり、様々な権利が保障され、強大な国家権力からの独立性が担保されている。しかし、権力への恐れ、諦め、麻痺…それらはいずれも権力側の問題の隠れ蓐と、私たちの思考停止をもたらし、いずれは監視機能の不全をもたらし、その先にあるのは、歴史に学べば、民主主義の崩壊、そして全体主義だ。

たかがODA で起きていること、なんと大げさな、と思われるだろうか。しかし、政府が税金を使って行っている以上、国家運営に関わる問題で、「されどODA」。自分たちの社会のありようを映す鏡にもなるのだ。だからこそ、小さな断片であれ違和感を見逃さず、問うていく責任が、JVC にはあるのだ。

◎注1…事前協議自体は非公開だが、議案書の最終化にあたって、その内容を「反映」させることができる。その議案書が提出される政策協議会、議案書・議事録ともに公開されるので、一定程度は可視化される。

イベントあらかると

10月～12月

イベント・ピックアップ!

11/22(金)～24(日) 沖縄での講演

アフガニスタンと沖縄、 訪問でできたつながり

広報担当 仁茂田 芳枝



講演するサビルラさん

社会の構造の類似点に着目

昨秋、アフガニスタンからは本誌12Pでご紹介したアジマルさんだけでなく、現地パートナー団体「Your Voice Organization (YVO)」の代表を務めるサビルラさんも11月下旬に来日しました。サビルラさんはこれまでも東京以外の場所で講演することはありませんでしたが、今回は初めて沖縄を訪問することとなりました。これは、2018年にJVCが第9回沖縄平和賞を受賞したことが理由の一つとなっています。

団体として沖縄とのつながりはそれまでなかったのですが、受賞をきっかけに沖縄戦に関してやその後の米軍統治時代、今も続く米軍基地問題等を学ぶ勉強会を団体内で実施しました。そのとき、問題が生まれる社会構造がJVCの活動地と似ているとの話が出ました。例えば、土地収用の問題や住民の声が政策に反映されないこと、また多数の無関心によって公正さを欠く現状が維持されてしまっていることなど。そうした現状に対して、当事者同士が交流する機会をJVCだからこそ提供できるのではとの提案がありました(サビルラさんは、かつて米軍の身勝手な行動に対してJVCが行った抗議を通して「対話の力」に気づき、個人的に平和教育の取り組みを続けていて、彼自身が一人の活動家でもあります(本誌326号参照))。

こうして、サビルラさんに沖縄を直接知ってもらうとともに、アフガニスタンの現状、自分たちの取り組みを沖縄の方に伝えるために沖縄訪問が実現することとなりました。日程は11/22～24の2泊3日ととても短いものでしたが、様々な方たちにお会いする機会をいただきました。

ライフストーリーを語る

初日のお昼過ぎに沖縄に到着し、まずは沖縄県庁で謝花副知事へ表敬訪問しました。受賞団体としての御礼と活動のご報告に加えて、首里城焼失について、サビルラさんからアフガニスタンでの文化財・遺跡の破壊などを経験している立場からのお見舞いの言葉、そして米軍の影響を受けながら平和を希求するアフガニスタンでの活動などについてお話をしました。

その後、沖縄キリスト教学院での公開講演会『アフガニスタン・ピースアクション』に登壇。アフガニスタンの現状や今行っている活動のみでなく、サビルラさんの日々の暮らしについて、また銃や力を持つ男性をカッコいいと思っていた

少年時代やタリバンを支援していた青年時代について、そしてそこからどのようにして対話で草の根のからの平和の実現を目指すようになったか、というライフストーリーをお伝えしました。

講演終了後、いただいた感想の中に「自分と関係ない遠い話だと思っていたけれど違うと知った。同じ人間の問題だと思った」とお声をいただき、知識としてだけでなく心に届いたということが非常にうれしかったです。

平和教育の重要性を再認識

2日目は午前中に沖縄平和祈念資料館と平和の礎を訪問。館長の外間さんがちょうど平和に関わる記念館などの会合で耳にした、シリア難民キャンプについての言葉をご紹介いただきました。「食料や医薬品などの支援はされていても、いちばん大事なものが足りていなかった。それは『平和教育』だ」というものです。

午後は沖縄平和賞委員会と共催しての講演会『僕が銃を捨てた理由(わけ)～米軍駐留が続くアフガニスタンで平和を作る～』がありました。そこで、外間さんから聞いたエピソードをサビルラさんが紹介していて、その言葉が特に心に残るものだったようです。

3日目は戦時中に教育を受けられなかった方々への識字などの教室も行っているフリースクール「珊瑚舎スコーレ」を訪問、アフガニスタン事業で行っている識字や平和教育の取り組みについて紹介しました。教育の価値について、また教育を受ける権利を実現するために連帯していけたら、と握手を交わしました。

その後は辺野古基地建設予定地のテント村を訪問し、お話をお伺いさせていただくことができました。サビルラさんにとっては国が行う事業に対して市民の平和的な働きかけで計画を一時的にでもストップさせることができるというのはとても印象的だったようで、「世界にとって意義ある実績」と言っていました。また、辺野古の方にもアフガニスタンでの活動などをお伝えし、ともに頑張りましょう、というシンパシーが生まれました。夕方に那覇を発ち、夜には東京に戻ってきました。

今回の訪問で様々なつながりを持つことができました。JVCからYVOとして独立したことなどから、今後日本に来日できる機会は少ないかもしれませんが、この出会いが今後に残る財産になれるようサポートできたらと思います。



当日は20名近くの方にお越しいただきました

いべんと・ピックアップ!

12/13(金) JVC東京事務所

JVC Palestine Night ～パレスチナに渡航した インターン・ボランティアが語る、現地の魅力、人びとの生活～

2019年度パレスチナ事業インターン 大下 美倫(みのり)

昨年12月13日、インターンとボランティアによるパレスチナ渡航報告会を開催しました。報告をしたのは、太田百恵(パレスチナ事業インターン)、大下(同左)、大庭未来(ホームページ更新インターン)、後藤美紀(英語ボランティア)の4人。全員が20代で、いずれも同年8～9月に現地を訪問しています。パレスチナで見た光景や出会った人びとについて、日本の方と分かち合いたいという思いでイベントを企画しました。

最初にトークショー形式で4人がパレスチナへの渡航体験を共有。おすすめの場所や魅力、滞在中にそれぞれが感じたことなどを語りました。登壇者が口をそろえて話したのは、パレスチナの人びとの優しさ。家庭料理をごちそうしてくれたり、道を案内してくれるなど、親切やおもてなしのエピソードが次々と出てきました。一方、パレスチナの置かれた状況に「もやもや」を感じたという話もありました。滞在中もイスラエルによるパレスチナへの入植や占領は続いているわけで、自分が旅を楽しんでいてもいいのか悩んだという声には、参加者も真剣な眼差しで聞き入っていました。

イベント後半では、パレスチナでも親しまれているアラブの伝統的なお菓子であるクナーファを食べながらの、自由に交流する場を設けました。クナーファは小麦粉からできた細

麺にチーズをかけて焼いたもの。シロップをたっぷりかけていただきます。振る舞ってくれたのは日本にクナーファを広める活動をしている大学生、山田悠さん。本場さながらの甘い味は、参加者にも好評でした。

参加者で大学生のSさんは、「日本にいるとなかなか分からない、パレスチナの現状やパレスチナ人の思いを知ることができ、パレスチナに想いを寄せることができました」と感想を寄せてくれました。ご自身も来年、現地へ渡航する予定があるそうで「とても楽しみになりました」とのことです。

今回の報告会は、私たちパレスチナ事業インターンが企画したのですが、最後まで気が抜けない状況でした。広報による集客やイベントの流れを考えるなど、やることは山積み。当日の開始数分前までバタバタしていました。イベントが始まると、今度は登壇者としてパレスチナで見てきたことをお話しすることに。準備と報告の両方を行う大変さを感じました。インターネットでも多くの情報が手に入る現在、わざわざNGOの事務所まで足を運んで来てくださったみなさまにどれだけのことをお伝えできるのか。イベントを作るうえで、強く意識したことです。

今回をきっかけとして、少しでもパレスチナに関心を持ってくださる方が増えればうれしい限りです。

その他の主なイベント

10/6(日)滋賀県大津市【外部講演】

国際貢献とSDGs

10/11(金)東京都渋谷区【外部イベント】

Luther Night Vol.10

耳をすませばカンボジア

※イベントの参加費の一部を寄付していただきました。

10/11(金)東京都新宿区

ジャーナリスト堀潤さんと語る 私たちが見た
ピョンヤン、あなたは思う?

現地を訪問された堀潤さんを迎えて、普段の報道では
伝わらない平壤の側面について話すイベントです。

10/29(火)東京都杉並区【ブース出展】

いのり題目市 堀之内妙法寺

11/1(金)東京都新宿区【講演】

アジマル、33歳。戦乱のアフガニスタン
に生きて

アフガン現地パートナーNGOのスタッフを招聘して、
その活動とこれまでの戦乱下での人生を語るイベント
です。

11/2(土)神奈川県横浜市長【ブース出展】

WEフェスタ2019

“もったいない”の思いは世界につながる!

11/3(水)東京都八王子市【外部講演】

アフリカ映画祭「ボパティンク」

上映イベントトークに登壇

11/16(土)東京都大田区【外部講演】

TABI LUNCH 食べて、知って、旅に出よう!

11/17(日)東京都台東区

JVC国際協力カレンダー2020発売記念

竹沢うまトークイベント

11/20(水)東京都杉並区

「対話の力で平和を目指す」アフガニスタン

現地NGO代表によるピースアクションプロ

グラムと現地の「今」について

11/22(金)沖縄県中頭郡【外部講演】

沖縄平和賞受賞団体公開講演会

「アフガニスタン・ピースアクション」

11/23(土)沖縄県浦添市【外部講演】

僕が銃を捨てた理由(わけ) 米軍駐留が続

くアフガニスタンで平和を作る

11/24(日)～29(金)

ラオススタディーツアー

11/30(土)東京都世田谷区

キッチン窓を開けて

食の未来を探しに行こう vol.2

12/2(月)東京都中央区【外部講演】

私たちに何ができる?

みんなで考えるはじめてのSDGs

12/6(金)京都府京都市【外部講演】

堀潤さんと語る

若者が手当てする日朝の「分断」

12/7(土)東京都新宿区【外部講演】

平和をどうつくる?

パレスチナの状況から考える

12/10(火)東京都新宿区

【初心者向け】美味しい虫の食べ方講座

カンボジアなどで盛んな昆虫食を国内で体験するイ
ベントです。

12/18(水)東京都千代田区

寄付って何だ? 寄付したくなるデザイン

12/19(木)東京都千代田区【外部講演】

「人道・医療要員の保護」と「対テロ政策下にお

ける人道スペースの確保」

12/23(月)東京都・参議院議員会館【外部講演】

プロサバンナ事業に関する

国会議員主催勉強会



JVC なひと

地方での暮らしと 国際協力

理事 天明 伸浩

私が住んでいるのは新潟の雪深い山奥です。25年前に米が作りたいと、農学部を出ると同時にターナンで村に移り住み、米作りをスタートしました。かつては小学校もあった集落なのですが、今では11人の住人子どもがいるのは我が家だけです。まさに過疎が進んだ限界集落です。とはいえ、近くの3集落と協力して、地域作りにいそしみ、25戸の住人で使う地域通貨をつくったり、少しでも地域の中で物やお金が循環する地域を作ろうと活動しています。

そんな過疎地域に住んでいると、同じ日本でも大都会と田舎でずいぶん「見える世界」が違ふことを日々感じています。JVCが活動しているアジアの国々でも、首都などの大都市は急激に発展していて、東京などの日本の都市と変わらない環境になっています。一方、地方の農村部での暮らしはゆとりとした変化で、電気が無い地域もあります。世界中で物やお金が動き回る新自由主義グローバル経済の中で、お互いの暮らしを尊重しながら幸せに暮らしているものか日々考えています。簡単に答えは見つかりそ



うありません。それでも、JVCのメンバーは現地の人たちと応答しながら、地域の人たちが幸せに暮らせるような社会を目指して活動しています。単純に発展すればいい・平和になればいいというのでは無く、地域の人たちが日々の暮らしの中で感じている幸せを大切にしながら、地域の人たちを支える活動をしているJVCの人々と話をし、活動できることは、私の人生にとつてとても大切なことになっていきます。

そして、そんなJVCの活動を支えるために、私の作っているアイガモ米なども活用したいと新たに「JVC応援米」の販売を始めました。お米を食べる日本の山間地の農業応援しながらJVCに寄付もできます。5キロのお米は通常よりも500円高いですが、農場からの寄付500円と合わせて合計1000円をJVCに寄付します。(10キロだと5000円の寄付、プラス農場からの1000円と合わせて1500円)。お米を食べる、日々の営みの中でJVCを応援しませんか？

JVC応援米は、「星の谷ファーム」のヤフーショップでご注文いただけます。

おすすめ映画

『ブレッドウィナー』

ノラ・トゥーミー監督

原作『生きのびるために』（テボラ・エリス）

2017年 93分

ボランティア 法貴 悠希



「悪いな」ハツとする言葉がこの映画には多く出てくるが、私にはこの言葉がとても切なく感じた。露店のおじちゃんが、りんごを売ろうとした主人公パウアーナに売れないことを謝った時の言葉だ。おじちゃんが悪いわけではない。優しいおじちゃんですえ果物ひとつパウアーナに売れないのは、女にものを売ることをタリバンが許さないからだ。

映画の舞台はアメリカ同時多発テロ事件後のアフガニスタン、カブール。パウアーナの父は元教師で、平和な時代を知っているが、戦いで脚を失っている。パウアーナはそんな父が路上でひらく商売を手伝っていたが、ある日その父が、タリバンの一員となった実の教え子に逮捕されてしまう。唯一の男性を失った一家は、同時に外を出歩く手段を失ってしまった。家族が生き延びるため、父を取り戻すためにパウアーナが決意したのは、男の子の姿となることだった…。

この映画の魅力のひとつは、こんな厳しい現実が臨場感あふれる、けれど優しいタッチのアニメーションで描か

れていることだと感じる。実写やドキュメンタリーとは違うリアリティがそこにはあり、音楽や街の光景もあいまってアフガンの世界が自分に近づく。

『この映画をどうしても、一言で語ることができない。タリバンを利用してきた大国の姿を想わずにはいられなかったからだ。ただ確実に言えるのは、翻弄されるのは常に、パウアーナのような市井の人々であり続けていることだ』フォトジャーナリスト安田菜津紀さんのコメントだ。先月亡くなった中村哲さんも、アフガニスタンで長年市井の人々に寄り添い続けた。この映画は、普段の報道からは伝わってこないパウアーナのような市井の人々の存在を思い出させてくれる。

最後になったが、この映画からは、この現実の中に生まれ、全力で生きる（でも成長途中の）パウアーナを通して、物語の偉大さ、友達や家族を想う気持ち、自由と平和の有り難さなどが伝わってくる。一回では足りない、何度も見たくなる作品だ。

お知らせ

2020年度東京事務所インターン募集

1年間、週2日、東京事務所で活動することで、NGOの視点や問題意識を学ぶインターン制度。国際協力に携わるスタッフの仕事を手伝いながら、国際協力の視点、問題意識、実務を学べます。特定の国の活動を支える、広報や会計などNGOを運営面で支えるなど、分野もさまざまです。毎年5～10名程度の学生、社会人等、様々な立場の方が参加しており、視野が広がるチャンス！2019年度の現役インターンによる「インターン募集説明会」も開催します。

活動期間：2020年4月～2021年3月

勤務時間：平日 週2日 10時～18時

応募締切：2020年3月2日（月）

募集説明会：2020年2月1日（土）14時～15時30分

2020年2月10日（月）19時～20時30分

2020年2月19日（水）19時～20時30分

説明会、応募方法の詳細については
JVC ホームページをご確認ください。

お問い合わせ JVC 宮西まで

TEL：03-3834-2388

Email：miyanishi@ngo-jvc.net（宮西）

お宝エイド

ご自宅に眠っている「お宝」を集めています

使わなくなった貴金属類やコインなどを誰かのために役立ててみませんか？お宝エイドに物品をお送りいただくと、買取額に10%上乗せされた額が、JVCへ寄付されます。いただいたご寄付は、JVC各地での活動で大切に役立てさせていただきます。2016年度は約300万円のご支援につながりました。お品物の査定額は、後日 JVC より書面にて連絡いたします。捨てる前に、ぜひ！ご協力ください。

「お宝」寄付を送る方法

ステップ1 お宝を梱包します。

段ボール5箱以上の場合は、「お宝エイド」による直接集荷も可能です（東京・神奈川・千葉・埼玉のみ）。

ステップ2 日本郵政に集荷依頼の電話をする。

集荷専用電話番号：0800-0800-111（通話料無料）
「ゆうパック」の「着払い」をご指定ください。

ステップ3 「お宝エイド受付センター」宛に伝票を書き発送します。

着払い伝票の「品名」欄には
「JVC宛「お宝エイド」」と忘れずに記入してください。

お問い合わせ・直接集荷ご依頼

お宝エイド受付センター・東京

〒156-0041 東京都世田谷区大原2-23-17-1F

TEL：03-6265-7595（年中無休 10：30～19：00）

投稿募集中

JVC や会報誌に関するご意見・ご希望をお寄せください。

また、「JVCなひと」への自薦寄稿も大歓迎！JVCの会員になったきっかけや最近の関心事、ほかの会員の皆様へ伝えたいことなど、800字以内でお送りください。

皆様からの投稿をお待ちしております！

投稿先 会員担当 横山まで

Email：yokoyama@ngo-jvc.net

FAX：03-3835-0519

募金集計

募金にご協力ありがとうございます。

JVC の活動は、皆さまの募金によって支えられています。

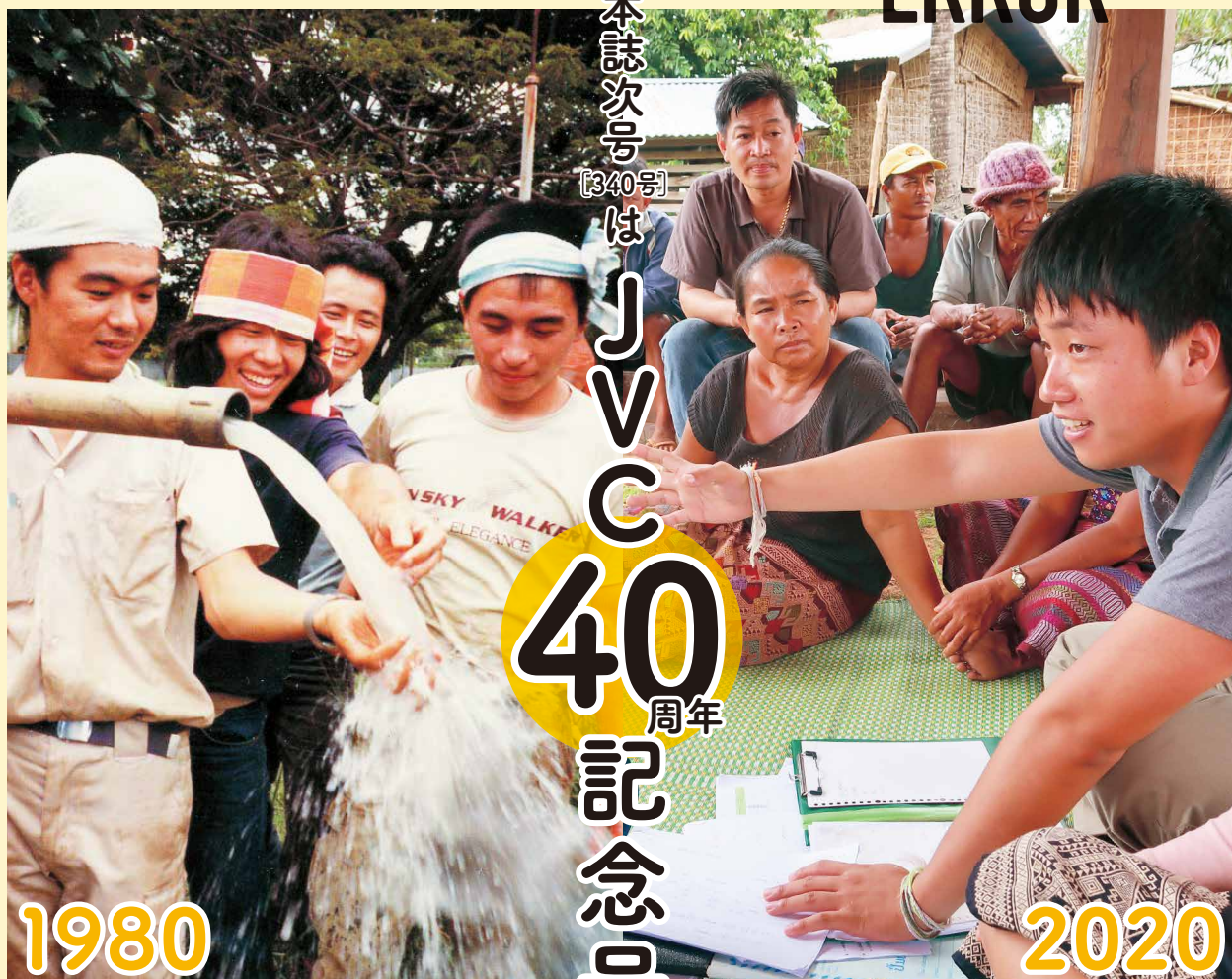
JVC への募金は、税制優遇措置を受けることができます。

指定先	期間（9～11月）
無指定	14,812,656
タイ	16,500
カンボジア	250,753
ラオス	235,000
南アフリカ	353,500
アフガニスタン	2,546,443
イラク	989,108
スーダン／南スーダン	1,216,600
パレスチナ	2,541,134
コリア	552,650
東日本大震災	4,000
モザンビーク緊急支援	7,000
ラオス洪水被害支援	1,410,375
みどり一本	101,500
東京管理	14,317
調査研究	53,000
カレンダー	500
合計	25,105,036円

※上表に「季節の募金（夏／冬／春）」も含まれます。

編集後記

OECDによる国際学力調査「PISA2018」によると、15歳以下の生徒の自宅でのパソコン利用率で、日本は10年前よりも13%も下がっているそう（他の大半の国の傾向は逆）。「こんなにスマホが普及してるのに？」それは他の国だって同じこと。元SEの立場から言わせてもらえば、スマホはしょせんコンテンツ消費のための「使う人」側のツールでしかない。一方、パソコンは「作る人」側のツール（高度な編集作業やプログラミングとか）。だれかが作ったものを使うことしかない／できない人だらけの国に、今後なっていくのだろうか。（H）



いま現在の世界と私たちJVCの
これまでの活動を振り返り、
現在の活動を通して見えてくる
現地からの課題や苦悩をお伝えします。

世界の課題に対峙した時に
はたしてJVCになにができるのか、
その活動にはどのような意味が
ありうるのか、あらためて考えます。



特定非営利活動法人
日本国際ボランティアセンター

日本国際ボランティアセンター(Japan International Volunteer Center)は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を続けてきました。JVCはボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

JVCでは会員を募集しています

会員数(1月1日現在) 合計926名(正会員528名 賛助会員398名)

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年4回この会報誌と年次報告書をお届けします。入会のお申し込みや、会員の方の住所変更などは会員担当の横山まで。

メールアドレス yokoyama@ngo-jvc.net

- 一般会員 10,000円
- 学生会員 5,000円
- 団体会員 30,000円

それぞれに
正会員と賛助会員があります。

JVCのオリエンテーションにお越しください

活動内容をご紹介します
説明会(オリエンテーション)の
詳細・お申し込みはウェブサイトから

会場 JVC東京事務所
参加費 無料